



— 巻 頭 言 —

核医学よりも有名になった PET

金 谷 信 一

(東京女子医科大学病院 核医学・PET 診療室)

ほんのここ 2, 3 年の間で「核医学」と言う言葉より, 「PET」と言う用語が市民権を得たように思える。もう動物のペットではなく小さい癌を早期に発見する PET 検査のことと言い直さなくとも通じる時代になってきた。

この加熱気味な PET のブームは, 放射線関係で以前にも見られた。それは1975年にわが国における X 線 CT 装置の臨床が開始されたときである。CT 装置が無ければ一流の病院に評価されないような雰囲気もあってか, 30年が経過した今では, X 線 CT 装置の普及と, その医療被ばくで世界の大国になっている。

PET の波及は, 長年, 核医学に従事しているものから世情を眺めると, いとも簡単に広まったと感嘆させられた。核医学の中の PET 診療の位置付けから, すでに脱却しひとり歩きを始めたようにも思える。よく見受けられる PET センターなる言葉は核医学とは無縁の部門を連想させている。

この PET の診療は, 高額な初期投資が必要となり, この損益分岐点を早く達成したい理由で, 高い検査費用と検査件数の増加が避けて通れない運命にある。これらの採算ベースに乗せるために, 苦痛が少なく, がんの検出能の高さを強調し, 患者集めに過剰な宣伝合戦を目にすることが多い。PET 検査は, がんの早期発見の万能機のように扱われ, その押し売りのような宣伝活動は, 以前の核医学からは想像できない。

本来, 核医学検査は医学教育の中で認識され, 依頼医より検査目的に応じて予約されている。しかし, PET 検査に関しては, 検診の部門が組織化され一般社会人からの直接の依頼も成立している。インターネットが広まったユビキタス社会なので全国的現象に思う。従って, 依頼医からではなく直接検査を申し込む, 不安を持った PET 受診者もいる。しかも PET ではなく PET/CT を受けたいと意思表示することもある。中には放射能を人体に投与して検査をすることを知らずに来院する。被ばくの話をするとう PET/CT を諦めて PET 検査にする受診者もいる。

PET 診療がこの短期間に社会に受け入れられた訳に。PET を説明するジャーナリストたちの分かり易い報道や記事がある。なかには間違った解釈から書かれたものも見るが, この分かり易く説明することが大切なことだと気付かされる。核医学専門の技術屋が一般社会の認識レベルを理解してより分かり易く, 且つ安心できるように説明をすることが大切である。

核医学が長い歴史を持っているにも係わらず, 一般社会に浸透していない事実を踏まえ, 市民権を得られるように分かり易く説明を加える。

この PET 診療の分野に, 核医学を理解しないで, 経営本意のままに加速してきた社会現象も, 根底は同じ理解不足が出发点であったように思える。